

小動物とのふれ合いで育む豊かな心

～ふれあいストリートの活動を通して～

市尾公子

1 学校の紹介

小平市は東京都の北西にあり、中央を玉川上水が流れる緑豊かな人口18万人の町です。小平第六小学校はその小平市のにしにあり、全校児童525人、17学級の学校です。コミュニティスクールで多くの地域やボランティアの方が学校を訪れます。

2 学校の動物と飼育の1日



学校にはモルモットが2頭、うさぎが3羽います。モルモットのモルタ、モルなが、うさぎのゆきみだいふく、グレ、マーブル。

一番の特徴は、この5匹の動物たちが、飼育小屋ではなく職員室の廊下に1匹ずつケージに飼育されていることです。

小平第六小学校では、飼育委員会が世話を担当しています。委員会活動と、毎日の常時活動が主な仕事です。児童は担当を決めて、一人一匹ずつ世話をしています。

朝8時、児童は職員室に来て、「おはようございます」の挨拶と共に、職員室入り口のえさの入った段ボール箱を廊下に運び出します。まずトイレの新聞紙を交換し、古い牧草や糞を捨てて、新しいえさと水と牧草を入れます。子どもたちが家からキャベツなどの野菜を持ってくることもあります。「はいはい、待っててね。」とか「おなかすいたでしょ」と話しかけながら世話をする児童もいます。

中休み、動物たちのケージは子どもたちに囲まれます。はみ出している牧草を引っ張り出してうさぎやモルモットに食べさせていたり、隙間から指を入れて額や背中をなでたり。飼育委員の児童もやってきて「そんな風に触るとこわがるよ。」とか「毛の流れにそってなでてね。」とアドバイスをします。

掃除の時間、2年生が動物に話しかけながらぞうきんがけをしたり、ほうきではいたりしています。

放課後、飼育委員の児童はまた職員室廊下に寄り、動物の様子を見てから帰ります。

夕方、先生たちが、うさぎやモルモットを眺め、おしゃべりしてくつろぐこともあります。

3 ふれあいストリートがうまれたわけと『ふれあいたい』活動

こんな風にいつでも動物たちとふれあえるようになったのは、2年前からです。それまで飼っていた鶏とうさぎが死んで、飼育小屋はすっかり寂しくなりました。そこで、井の頭動物園から3頭のモルモットを譲っていただきました。その1年後、今度は地域の方から子うさぎ3羽をいただいたのです。子うさぎたちはあまりにも小さく頼りなげでしたので、しばらくは動物が大好きな校長先生の部屋、つまり校長室に住むことになりました。うさぎたちは、少しずつ子どもたちに紹介され、休み時間は校長室が児



童でいっぱいになる日もありました。友達とけんかしていらだった気持ちで校長室に来た児童が、かわいいうさぎを見ているうちにすっかり落ち着いて自分の教室に戻っていくこともありました。なぜか職員も、この小さな動物たちを見て心が和むのを感じるのでした。

こんな校長室での子どもたちの様子を見て、児童の身近な場所で飼育をすれば子どもたちにいい影響が出るのではないかと、心が豊かに育つのではないかと私たちは考えるようになりました。

それが「ふれあいストリート」の始まりです。新しいケージを購入し、まず職員室廊下とうさぎたちを置いてみることにしました。教師の目が届き、飼育委員会の児童の仕事の様子もすぐ分かるという利点もあります。その後、モルモットも置くことにしました。

と、とんとん拍子にことが進んだように書きましたが、動物たちを廊下に置くことには、いろいろな意見があるようでした。アレルギー対策は大丈夫か、廊下が動物のおおないか等です。しかし、うさぎたちの愛らしさや人なつこさにほだされ、アレルギーやにおいも思ったほど心配ないことがわかりました。そして最後は動物好きの校長先生が屋内飼育を決定づけました。

そうして「ふれあいストリート」と名付け、その名札を下げた花のアーチを廊下の2カ所に取り付けました。用務員さんがアーチを固定するのを手伝ってくれました。アーチの下、6個のケージが廊下に並んでいるのは壮観でした。



この「ふれあいストリート」で飼育委員会が行う『ふれあいたい』の活動があります。

30分の中休みを利用し、飼育委員会が中心になって学校の動物たちとふれあう活動です。丸くなって座った子どもたちに、飼育委員が順

番にモルモットを膝に乗せてあげたり、うさぎをさわらせたり、職員室の廊下は大賑わいになります。飼育委員の児童は自分でキャベツやんじんを小さく切って持って来て、一人ずつに分けてあげます。モルモットはひざに乗せられたまま、もぐもぐとえさを食べて人気です。うさぎをさわった子は、みんなそのやわらかさと温かさに感動します。



4 育つ豊かな心

飼育委員の児童の中には、不登校気味の子や教室ではひっそりと目立たない子もいます。その子たちが動物の飼育を通して大きく成長していきます。

昨年4月、6年生のA君が最後の当番の日に、私に向かって気をつけをして立ち、「先生、1年間お世話になりました。」と深々とお辞儀をしました。A君は初めのうちは担当のモルモットを抱き上げることができず、世話の段取りも今一つでした。が、まじめに当番をこなしているうちに上手に世話ができるようになりました。土日に一人で6匹の世話ができるまでになりました。学習や生活面でも成長が見られるようになりました。6年生でも飼育委員を希望したが叶わなかったとのこと。当番最終日に思いを込めての「お世話になりました」の挨拶でした。

今年の飼育委員はというと……。

- ・不登校気味だったB君が、飼育委員になり毎日学校にくるようになりました。
- ・6年生のC君の毎日生き生きと幸せそうに過ごしている姿が見られるようになりました。C君は朝・放課後、それから休日のほとんどを世話に来ます。移動教室の日の朝も、いつもより2時間も早く学校に来て、世話をしてから出かけました。お気に入りのうさぎのマールとふれあっている時は本当に幸せそう

です。

- ・勉強があまり得意でないD君は動物の世話がとても上手で、その自信に満ちた姿は教室とは別人のようです。
- ・教室ではほとんど声を出さないEさんは、当番に積極的に手を挙げみんなをびっくりさせました。挨拶や会話も以前より大きな声でできるようになりました。
- ・Fさんは動物が好きで仕方がないのですが、モルモットを抱くことがまだできません。当番でない日も毎日「ふれあいストリート」にやってきて、抱く練習をしています。6年生が移動教室で留守の5月、そのFさんが6年生の分まで3羽のうさぎの世話をしてくれたのにはびっくりしました。そのFさんと同じクラスのHさんも生き生きとして、飼育の仕事と友だちと一緒にの世話に生き甲斐を感じている様子です。
- ・2年連続飼育委員のIさんは、休日、学校の和太鼓練習が終わると必ず動物たちの様子を見に来てくれます。その姿に動物たちへの深い愛情を感じます。



このように動物の世話を通して、飼育委員の子どもたちは成長していきます。また、飼育委員だけでなく、学校の子も動物に癒され、優しくなったように感じます。2年間が過ぎ、校長先生がテレビ朝会にうさぎのグレを抱いて登場したり、学校のホームページで飼育委員会を紹介したりして動物たちはすっかり人気者になりました。みんな、動物たちをうさぎとかモルモットとかではなく名前です。

5 モルモットの死

悲しいこともありました。昨年の夏休み、モルモットのモルモが熱中症で命を落としてしまったことです。ちょうど、当番を休みにしたお

盆の頃の出来事でした。モルモの変わり果てた姿に、担当者の私たちは、飼育委員の子どもたちに伝えるべきか迷い、結局話せませんでした。そのため、飼育委員の児童はモルモとお別れをすることができませんでした。この対応が子どもたちにとってよかったのか、今でも悩むところです。

2、3日後、世話に来た飼育委員のJさんは、モルモの死を聞くと、はっとして、同じ飼育委員のKさんのことを心配しました。自分も悲しいのですが、いつも動物をかわいがっている仲良しのKさんはどんなにショックを受けるだろうと、心配になったのです。モルモの死を聞いたKさんは、悲しみをこらえ、花を買い手紙を書いてきました。そして、黙って手を合わせモルモに祈っていました。

2学期が始まり、朝会で校長先生がモルモの死を告げると、モルモの小屋には、折り紙や手紙が置かれるようになりました。手を合わせていく子もいました。今でもモルモの写真は、他の動物たちと同じように廊下にはってあります。子どもたちは、時々モルモの話をして忘れずにいてくれます。

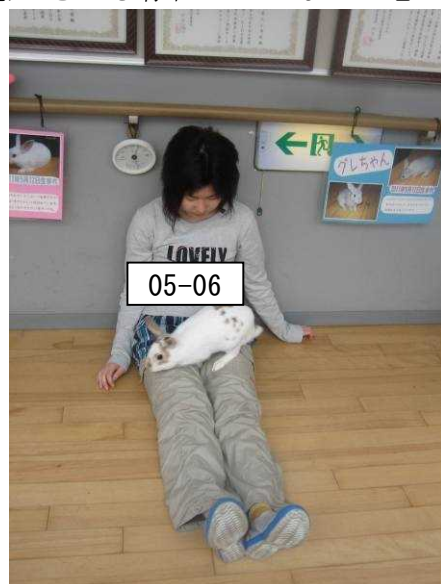
「ふれあいストリート」のケージは一つ減ってしまい5個になりました。

夏休み、中学生になったKさんが花を持って学校に来ました。「モルモの一年忌だから。」と。それを聞いた職員室の私達は胸がいっぱいになりました。

6 最後に

今まで、私は学校の飼育動物は不幸だ、えさも満足に与えられず、汚い飼育小屋にほったらかされ、人に甘えることも知らず、死んだときに罪の意識を感じさせる存在でしかないと思ってきました。

学校の動物達は何のために存在するのかと疑問を抱き続けてきました。しかし、3年間の児童の笑顔と心の成長、私たちに信頼し甘える動物たちを見ると、本校の



やり方はこれからの学校動物飼育の1つの方向ではないかと思うようになりました。

大きな費用をかけての飼育小屋の整備もありません。ケージを購入し、設置するだけです。ケージは、専用トイレを備えるなどして清潔で、掃除も手間がかかりません。児童は自分がふれあいたいと思うときに動物に会いに来ることができます。この3年間、本当に多くの児童がケージの前で立ち止まり、笑顔になりました。最近アニマルセラピーの話をよく聞きますが、うさぎやモルモットに児童が癒されているのを実感します。本校には不登校児童がほとんどいません。これは、職員室廊下の動物たちの癒しの効果もあると思います。

また、動物にとっても人間の目が行き届き、体調の変化にすぐ気付き、かまってくれるなどいいことがたくさんあります。小平六小の動物たちは人間が大好きです。

生活科や国語・理科の学習をするときも、この飼育方法は便利です。廊下で動物を観察したり、キャスター付きのケージごと教室に運んだりできます。そんな時私たちは動物に「お仕事ですよ」と声をかけ、担任の先生は動物のさわり方を確認して教室に連れて行きます。

学校では今年度委員会担当以外の先生が『うさモルメイト』として手伝ってくれるようになりました。夕方のエサやり、長期休みの動物たちのホームステイなど自分のことで、世話をしてもらっています。職員みんなで動物を見守っている安心感があります。

そして、やはり管理職の理解と協力が必要です。「動物は外の飼育小屋」というこれまでの固定観念を変えて、子どもたちのためにも動物たちのためにもよりよい飼育に取り組む学校が増えてくれることを願っています。



(東京都小平市立小平第六小学校教諭)

